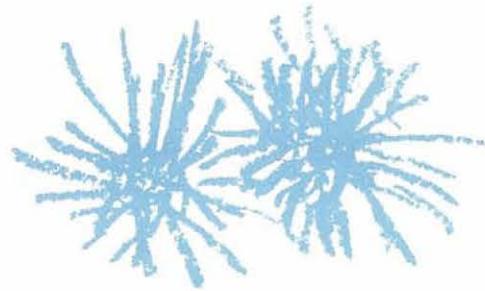


の大半は自分で種を蒔いた結果のようなものですから自縄自縛で止むを得ません。せっかくですからいくつかの新しい試みが日本放射光学会および放射光科学の発展に対してプラスの効果をもたらすことを願って交代いたします。



1993年度幹事報告

庶務幹事この一年

東京大学工学部 石川 哲也

1993年度は、菊田会長のもと学会活動の再検討、国際交流の推進、各施設・利用者団体との合同シンポジウムの検討など、放射光学会の新しい発展を予感させるいくつかの活動が開始され、庶務幹事として微力ながらささやかなお手伝いをさせて頂きました。

しかしながら、いろいろと不手際も多く、会員の皆様に御迷惑をおかけしたのではないかと危惧しております。お詫びしなければならない第一点は、事務の合理化の一環として、Fax通信をはじめたのですが、会員数の多い機関への連絡時に非常に長時間に亘ってFaxを専有してしまったことです。おしかりを受けてみると、当然予想されたことであり、事前の検討の甘さは弁解の余地がありません。この点に関しましては、漸次改善を図ってまいりましたが、まだ完全なシステムになっていない点もございますので、会員の皆様方におかれましては、お気づきの点を是非、事務局ある

いは新幹事宛お知らせ頂けます様お願い申し上げます。

第二点は、評議員会を定員数不足で成立させ得なかった庶務幹事第2号となってしまったことです。皆様、超多忙な評議員の先生方のスケジュールの調整はかなり大変ですが、当方の楽観的期待が裏切られ、ご出席の評議員各位に御迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。また次期庶務幹事には、マーフィーの法則から「出席の返事を頂いても、出欠は確認しなければいけない」という項目を申し送ろうと考えております。

以上、何事にも至らない庶務幹事ではございましたが、1年間なんとか乗りきれたのは、西野さんをはじめとする事務局のご努力と、庶務以外の優秀な幹事諸氏のご努力の賜物です。誌面をお借りして御礼するとともに、放射光学会の今後の益々のご発展をお祈り申し上げます。

会計幹事この一年

大阪大学産業科学研究所 磯山 悟朗

昨年、菊田会長から会計幹事をやるようにという電話を頂いた時にはお引き受けするかどうか少し迷いました。それまでは行事委員を短期間勤めたことが有るだけで、放射光学会の活動については何も知らないのも同然ですし、会計業務の知識も有りません。また、住んでいた場所は愛知県岡崎市であり、幹事会や評議員会の開かれる東京とはだいぶ離れております。しかし、各種幹事の内でも会計幹事は最も楽であると言った話を聞き、何とかなるだろうということとたまには東京の空気を吸いに行こうといういいかげんな気持ちで会計幹事を引き受けました。会計幹事としての最初の仕事は新年度予算の編成ですが、前任者の飯田厚夫氏と事務局の西野三和子氏に作っていただき何とか出発しました。1年たった現在でも評議員会での報告も満足には出来ませんが、ようやく会計幹事は何をすれば良いか、何をすべきであるかが分かってきました。

昨年度は、菊田会長の指導の下に放射光学会のさらなる発展を目指して学会活動特別検討委員会

が設置され、活発な活動を展開しました。そのため、会議費が当初の予算額を大幅に超過してしまい、年度末の収支決算が赤字に転落する恐れが出てきました。そこで緊急退避的ではありますが評議員の先生方に講習会の教科書などの学会所有の図書を購入していただき事態を乗り切りました。この場をお借りして、先生方に厚くお礼を申し上げます。総会で報告しましたように、結果として1993年度の収支決算は10万円の黒字となりました。実は、収支決算が綱渡りであった原因は会議費の支出増ばかりではありません。学会収入の内、高い割合をしめる企業からの賛助会費や広告料収入が、経済状態を反映して減少したのも原因の一つです。

慣例により幹事は通常2期2年勤めることが多く、私ももう1年会計幹事を勤めさせていただくことになりました。少し様子のわかった2年目は、学会の財政基盤の確立のため幹事の一人として働かせていただくつもりです。



編集幹事この一年

お茶の水女子大学 浜谷 望

たいへんアクティブだった大嶋前編集幹事の後を受け、手探りで会誌の編集を務めさせていただいた。滞りなく会誌を発刊できたのは、貴重な時間をさいて執筆して下さった多くの方々と編集委員・事務局の皆さんのおかげと感謝しています。少し気がかりなのは加速器・光源関係の記事が減少していること。編集委員会としても努力するのでこの分野の方々のご提言・援助を期待したい。

さて、フォントファクトリーニュース、SR科学技術情報、光彩、そして放射光。それぞれに個性はあるものの、商業誌ならばいずれかが休刊に追い込まれてもおかしくない現状がある。必然、学会

誌は何を目指すのか、が問いかけられている。これまでの編集委員会の基本姿勢は、専門外の読者あるいは初心者のイントロダクションにもなりうるしっかりした解説やトピックス、実験技術の掲載にあった。基本的に発刊以来の編集方針と変わらない。一方、もっと気軽におもしろく読めてニュース性が豊富な記事を、という声も高い。「学会活動総合検討委員会」の報告にも年6回の発刊と情報誌化がうたわれている。これらの状況を踏まえて、今年度の早いうちに会誌のあり方について結論を出すつもりである。会員の皆さんのご意見を伺うこともあると思うのでご協力をお願いしたい。

渉外幹事この一年

富士通研究所 古宮 聰

他学術団体から12件の後援/協賛依頼を受けました。昨年度は8件でした。放射光学会活動が定着してきたことの現れかと思えます。また、来年度の第16期日本学術会議会員選挙で、学会を代弁して頂く候補者および推薦人の登録を、今年度行いました。評議委員会でご検討頂き、石井武比古(東大)先生および菅滋正(阪大)先生に、各々お引受戴きました。現在、登録が済んで、選挙を待つ段階であります。皆様のご支援をお願いいたします。

最後に、懸案のSynchrotron Radiation News

の適正配付(放射光学会員への無料配付)であります。残念ながら、今年度中に決着させることが出来ませんでした。一応の道筋は見えてきました。やがて、会員の皆様のお手元に、配付リストへの登録カードをお届け致します(学会誌へ綴じ込む予定)。希望者はお申込願います。この方式は、送付先の変更届けなど、今後継続して行う予定です。ご協力をお願いいたします。最後に、2年間、色々な方々にお世話になり、有り難うございました。

行事幹事この一年

NTT 尾嶋 正治

1993年度の行事幹事として、(1)放射光フォーラム'93(行事委員会)を企画・実行した。また、(2)第7回年回実行委員会(委員長:菅滋正阪大教授)と(3)アジア交流放射光フォーラム実行委員会(委員長:太田俊明東大教授)で副委員長を務め、その運営を側面からサポートすると同時に、放射光学会会長へのパイプ役を努めた。アジアフォーラムは年会(3日間)の一部として開催されたため、行事幹事が両実行委員会の『橋渡し役』となるべく非力(?)を尽くした。本号が出版されるころには大成功裏に終わっていることと確信している。以下に、各項目についての活動報告を示す。

まず、『放射光フォーラム—界面の世界に光をあてる—』については、92年度開催した『放射光フォーラム—放射光が拓くミクロの世界—』に引き続いて、世界的に活躍している研究者を集めてそのトピックスを披露してもらい、放射光の新しい研究分野開拓の一助としたいという趣旨で開催した。92年度のMenz教授(カールスルーエ原子核研究センター)に続き、今回はAT&Tベル研究所からFuoss博士を特別招待した。

平成5年11月5日(金)に東大本郷山上会館2F大会議室にてフォーラムを開催し、59名の参加者を得た。ここ2年間の経済不況にもかかわらず、かなりの盛況であった。本フォーラム開催に当たって、6名からなる行事委員会【尾嶋(NTT)、水木(NEC)、難波(東大)、高桑(東北大)、泉(東大)、堀井(富士通)】を構成し、3回の行事委員会を開いて招待講演者、プログラムなどの詳細を決定した。今回は討論の時間を設けて、い

ろんな意見を出してもらったのが良かったと思っている。本フォーラムの詳細は放射光学会誌Vol.7, No.1に報告してあるのでそちらを参照して頂きたい。

このような企画は、放射光研究の今後を探る意味で極めて有意義であるのでこれからも面白いテーマを選び、国際的研究者を招待してどしどし開催して行ってほしいと考える。

次に、放射光学会第7回年会(実行委員会:菅阪大教授)であるが、昨年の年回と同様、行事幹事が副委員長となり、放射光学会幹事会との連携を密にした。平成6年5月11~13日(水~金)に神戸市産業振興センターで行われる。菅委員長のもと、17名の委員がテキパキと作業を進め、非常にスムーズに運営されて来た。心配していた年会への発表申込みも約190件に達し、また企業展示の申込みも約30件と極めて順調に進行している。委員長の強い指導力の下で、各委員の蔭の努力は大変(?)なものだったと察するが、それを支える原動力はSPring-8の熱気にあるのではとも思っている。施設の運転がもう3年余りに迫り、関西地区の意気がぐわーと(!)盛り上がりつつある。関東もうかうかしてられないなと合計4回の実行委員会(大阪地区で開催)に出席する度に感じた次第である。

実は、93年度放射光学会会長であった菊田教授の強い希望でアジア諸国との交流を深めるフォーラムを年会と一緒にやることが決まったため、今年の年会は3日目に『アジア交流放射光フォーラ

ム』を行うこととした。その実行委員長には、数年前に広島で類似のシンポジウムを運営された太田東大教授が最適との判断で、委員長に就任してもらい、行事幹事が側面から支援することとなった。また、第7回年会の菅実行委員長にも委員になってもらい、アジアフォーラムは、太田委員長、菅委員長、菊田前会長の『トロイカ体制』で進められた。合計12名からなる実行委員会が5回開催された。太田委員長の広い顔(?)のお蔭で海外から非常に好意的な返事が来ており、順調に準備が進んでいる。

アジア諸国とは、中国(北京, 合肥), 台湾, 韓国, インドであるが、今回はこの他にロシアとオーストラリア(PFビームライン)も加えて7施設から所長クラスの研究者を招待し、おのおのから2~3名の随行者にも援助を出す。また、放射光施設建設の計画があるタイからも招待する。国内からはPF, 分子研, 東大物性研, SPring-8から招待し、“Synchrotron Radiation Facilities in Asia”という300ページ以上の立派な(?)本も印刷した。菊田前会長からは『ブラジルもアジアだ!』という発言も飛び出して、際限なくなったりもしたが、とにかく当日のフォーラムが待ち遠しいというのが実感である。大いにアジアの研

究者との交流を深めていきたい。

以上、この1年間の行事幹事としての活動を述べてきたが、行事幹事を務めさせて頂いたこの2年間は私にとって非常に貴重な時であり、得たものは極めて大きい。岩崎元会長, 菊田前会長, 太田委員長, 菅委員長から多くを学んだ。ご指導に対し、厚く感謝申し上げます。

最後に私見を述べさせて頂きたい。12年前にSSRLで放射光研究を行っていた人間として常日頃から思うことは、日本では放射光ソサイエティにおける民間企業研究者の位置がなぜこんなに低いのか、米国と何が違うのか、何が足りないのか、という点である。この2年間はこの現状を少しでも変革させたいと思い、微力ながら全力を尽くし、また民間の元気な(?)研究者には出来るだけ委員になってもらった。寄付集めのために委員にするのではなく、その能力を発揮させるためである。

ともかく、2年間無事に終わってホッとしている。協力頂いた水木さんを始めとする行事委員の方々、年会やフォーラムの実行委員の方々、学会幹事の皆さん、事務局の西野さん、アルバイトの方々、その他多くの人達にこの場を借りてお礼申し上げます。

